凪の光景

なぎのこうけい

佐藤愛子

朝日新聞社

凪の光景

佐藤愛子

朝日新聞社

凪(なぎ)の光景(ころけい)

定　価　一三〇〇円

一九八八年十月二十五日　第一刷発行
一九八八年十二月二十五日　第四刷発行

著　者　佐藤愛子
発行者　八尋舜右
制　作　朝日新聞東京本社制作局
印刷所　凸版印刷
製本所　青柳製本
発行所　朝日新聞社
〒一〇四―一一　東京都中央区築地五―三―二
☎〇三―五四五―〇一三一（代表）　振替　東京〇―一七三〇
編集・図書編集室　販売・出版販売部
©Aiko Sato 1988 Printed in Japan
ISBN4-02-255927-6

凪の光景・目次

幸福の条件　5
熟女の翔び方　58
しあわせ妻　112
老いらくの春　161
不惑　217
六十四歳の抵抗　272
冬の嵐　328
探春　387
混迷　441
夕凪　486

本書は、「朝日新聞」昭和六十二年十一月十八日から昭和六十三年八月三十一日までの連載に加筆されたものです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凪の光景

装幀・灘本唯人

幸福の条件

1

大庭丈太郎のことを、人は幸せな男だという。

まず第一に彼には古いが百坪ほどの土地つきの家がある。東京の地価がまだろんと安い頃に地主に頼まれて特に安値で買ったものだが、それが今は何十倍という値段になっていると世間は騒いでいる。

十年前、その庭の西寄りに長男の謙一夫婦と孫のための家を建てた。生活は別であるが、縁側に立って呼べばすぐに答えが返ってくるという距離である。

この二月、丈太郎は七十二歳の誕生日を家族に祝われた。その時の写真がパネルに作られて茶の間に懸かっている。丈太郎と妻の信子を真ん中に謙一夫婦、孫の吉見。長女の珠子と銀行員の夫である秋野満と二人の子供。名古屋で小学校の教師をしている次男の康二も駆けつけてきて、一族全員が笑顔を作っている。そのパネルも人の目には幸福の象徴に見えるだろう。

今、人が「幸福な老人」というのは、老後を息子や孫とひとつ囲いの中で暮らせるということを指

しているのである。しかも丈太郎は息子の厄介になっているわけではなく、「息子一家を住まわせてやっている」という優位な立場にある。そのことだけでもたいした幸福だと人はいう。

――まったく、人間の幸福も安くなったもんだ……。

丈太郎はそう思わずにいられない。

春になると大庭家の庭は、まるで絵本の庭のように明るく彩られる。信子が丹精している春の草花が一斉に花をつけるからである。門の傍には樹齢百年になるかと思える桜の大木があって（それはおそらくこの住宅地が荏原郡世田谷町と呼ばれていた頃の山林の名残の桜だと思われる）、毎年、それが見事に花を咲かせる。道行く人が思わず立ち止まって見上げるほどの見事さで、それも大庭家の幸福の一つに数えられているかもしれない。「今どきこんな見事な桜を邸内に持っているなんて、よほどの大邸宅でないとザラにはありません」と人はいう。

しかし息子の謙一はその桜を切りたがっているのだった。それを切ればそこにガレージが作れるのである。彼は安田自動車直営の営業所である「ヤスダポルカ」の代理課長であるから、ガレージを作ることが出来ればマイカー通勤が可能になるのだ。

だが謙一は父に向かってそれを強硬にいい出せないでいる。彼にはいっても無駄であることがわかっているのだ。百年近くも生きてきたこの桜の命と自動車とどっちが大切だ、という父の台詞（せりふ）まで謙一にはわかっているのである。

「親父が生きているうちは駄目だ」

謙一はそういってバスと地下鉄を乗り継いで、一時間余りかかって東京都の東の外れの町へ出勤している。謙一は争いを好まぬ穏やかな人柄の努力家である。大庭丈太郎の幸福の要（かなめ）はそういう長男を持ったことだと人はいう。

丈太郎は毎朝六時頃に目を醒ます。それは教師をしていた頃からの習慣で、十二年前に停年退職した後も変わらない。起床時間を六時と決めたわけではないが、その時間になると自然に目が醒めてしまう。目が醒めるともう一刻も寝床に入ってはいられない。

丈太郎は欄間から漂ってくる薄ぼんやりした明かりの中で、左側の布団の信子を見る。以前はそこで、

「おい」

と声をかけたものだ。それでも反応がない時は、

「いつまで寝てるんだ……」

声を大きくした。

だがこの頃は何もいわずに黙って起き、顔を洗って散歩に出る。好きで散歩をするわけではないが、低血圧で寝起きの悪い信子が起きて部屋を片付けたり朝食の支度をする間の時間つぶしのためである。

古い住宅地であるこの界隈も、この四、五年、古家が取り壊されてところどころ新築の家屋やマンションに建ち変わりはじめている。道筋は昔のままだが、新しい建物と古びた家屋とが入り混じってちぐはぐな街並みになってしまった。

今は春なので、半ば新しく半ば古びた街並みに昔ながらの塀越しの、桜や木蓮や辛夷が咲いているのが、却って丈太郎にはもの寂しい。

「已ニ見ル松柏ノ摧カレテ薪ト為リ
更ニ聞ク桑田ノ変ジテ海ト成ルヲ」

劉廷芝の詩の一節がひとりでに唇に上ってくるのである。

「古人復(ま)タ洛城ノ東ニ無シ
今人還(ま)タ対ス落花ノ風
年々歳々花相似タリ
歳々年々人同ジカラズ……」
ふと見ると遠くの曲がり角から赤いものが現れた。遠目には男か女かわかりかねるが、丈太郎には顔見知りの食品会社会長であることがわかっている。臙脂(えんじ)色のトレーニングウエアはみるみる近づいてきて、
「やあ、お早うございます」
艶のある張った声がいった。
「今朝はもう一万歩を突破してますよ」
会長は万歩計というものを持っていて、毎朝一万歩を目ざして歩いている。もう十年近い朝の顔馴染みである。
「だらだら歩いているだけではいくら長時間歩いても何の役にも立たんのです。こうして背筋をスッと伸ばして、真っ直ぐ前を見て、大股に歩く。大股になれば自然速度がつきます。姿勢を正して早く歩く。足腰の鍛練にはそれが肝腎です」
会長は丈太郎に会うたびにそういう。しかし丈太郎は足腰の鍛練のために歩いているのではない。低血圧で寝起きの悪い妻が起きるまでの間、時間をつぶしているだけであるから、
「はあ、なるほど」
というだけなのである。
「こうして一万歩歩いて、家へ帰るとまず柿の葉茶を飲みます。自家製です。庭の柿の葉を若葉のう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちに採って蒸して乾かしたものですが、経済的でもあるし、何よりビタミンCが……」

丈太郎は聞いていない。何年か前、この人は紅茶キノコというものを推奨していた。それから九竜虫という虫を生きたまま呑んでいて、紙箱に飼っているからあなたにもさしあげたい、強精に効き目があります、といっていた時代もある。その頃は九竜虫のおかげでわたしはこのように元気ですといっていたが、今は柿の葉茶のおかげですといっている。

「とにかく長生きして、少しでも人生を楽しむことですよ。わたしは当年七十八ですが……」

という口癖が出ると、丈太郎は脇道に逸れることにしている。

――この上生きてそれが何だというのだ。

丈太郎はそう呟かずにいられない。老人が若々しく元気でいることは若い者にとっても喜ばしいことですからな、と会長はいう。ですからわたしは家族のため、会社のためにも頑張らねばと思っているんですよ……。

あの会長こそ「幸福な老人」というべきだ、と丈太郎は思う。自分が何かの役に立っていると思える人は幸せだ。

――実際に役立っているかどうかは別として、とにかく、そう思えるということは……。

丈太郎は会長に会うたびに皮肉な気持ちが湧いてくるのをどうすることも出来ない。彼の胸中はこの数年常に鬱屈しているといっていい。昔の教え子や後輩は、先生もこの頃はすっかり穏やかになられましたねというが、穏やかに見える分、胸の中には憤懣がとぐろを巻いているのである。

十二年前、東京都近郊の小学校長を停年退職した後、丈太郎は教育委員長や幼稚園の園長、図書館長などを経て、七十の声を聞いた時からすべての公職から遠去かった。もう今の世の中で、自分が役に立つことは何もないと判断したからである。三人の子供は独立し、老夫婦二人の暮らしは年金で間

に合う。家計の切り盛りのうまい信子のおかげで若干の蓄えもある。
目下の丈太郎は知り合いの子供三、四人に習字を教え、時々は英語や数学を見てやったりしているが、それらはすべて無報酬である。若い頃は画家になりたかったのだが、父の希望で教師になってしまったので、今になって絵を描いている。時々は油絵も描くがたいていは水彩画で満足している。スケッチ帖を持ってふらっと山や海へ行くこともある。こういう生活を人は「悠々たる老後」であるといって羨望する。だが丈太郎は「こんなものはただの無事平穏に過ぎない」と思っている。無事平穏が幸福だなどと、いったい誰がいい出したのか。
「建設すべきもの、あるいは破壊すべきものがなくなると男は不幸だ」
丈太郎は愛読書であるアランの幸福論の中のそんな一行に傍線を引いた。建設すべきものも破壊すべきものも、もう丈太郎にはない。あったとしてもそれはもはや夢でしかない。
丈太郎を取り巻くすべての現実が彼には気に喰わない。
「今の校長連中、あれは何だ、教育委員会の手先にすぎんじゃないか」
彼はいう。しかしそれをいう相手は今は妻の信子だけである。
「教育委員長、あれは文部省の家来だ！」
「日教組は闘争のための文句ばっかり考えて子供を忘れておる！」
「ＰＴＡ会長は学校の小使いだ！」
「ＰＴＡの母親連中はどれもこれも木を見て山が見えん……」
そんな時、信子は言葉少なにこういう。
「ほら、また相撲の桟敷……」
現実にたずさわっていない者は桟敷の見物人と同じで、力士の批評だけしていればいいのだから気

らくでいい、というのである。
そういわれればその通りだった。今の丈太郎にはこの気に入らない現実社会を破壊することも建設することも出来ない。槌をふり上げるのは勝手だが、打ち下ろす場所は彼には与えられていないのである。
「桟敷か……うまいことをいうな」
丈太郎は憮然と呟くしかない。
信子の声はいつも低い。若い頃は気持ちのいいアルトだったが、六十を過ぎた頃からただ低いだけの無表情な声になってしまった。昔は色白だったがこの頃は少し肌が黄ばんできて、薄い眉の下、たださえ細い目にたるんだ上瞼がかぶさってきていて、愈々この女も老女の域に入ってきたなと思わせられる。
信子は昔から言葉数が少ない方だが、丈太郎はそれを可としてきた。女のおしゃべりは嫌いである。女は素直でおとなしいのがいい。一緒にいて手応えがあるという女ではないが、そんな信子を丈太郎は気に入ってきた。
「来世はまた母さんと一緒になりたいものだな」
丈太郎はいったことがある。
「低血圧さえなかったら天下一の女房だな」
「お母さんはどう？　やっぱり来世もお父さんと結婚したい？」
息子に訊かれると信子はぽつりといった。
「どんな人と一緒になっても同じよ」
「つまりかつて日本の女性にとって結婚ということ、妻という立場はどんなものだったか。今のお母

さまのお返事はそれを象徴していますわね」
謙一の妻の美保がいった。彼女は元婦人雑誌の編集者だったが今はフリーライターとして働いている。
「お父さん、ブが悪いよ。改めてお母さんに求愛しなくちゃ」
謙一がいったが丈太郎は信子の返答を意に介していない。信子はそういう表現しか出来ない女なのだと彼は思っている。
とにかく信子は常にいい受け皿だった。丈太郎の心の中の憂悶憤懣も信子にはわかっている。もし今の自分に幸せがあるとしたら、信子という妻がいることだろう——彼はそう思っているのだった。

それは穏やかな昼過ぎだった。
春酣という趣で庭中が彩りを競っている。謙一の住居の形ばかりのテラスの前には赤と黄色のチューリップが行儀よく一列に並び、その手前に桜草、向こう側は紫と黄色が交互に咲いているパンジーである。裏隣との境の塀際には、こでまり、山吹、ぼけ、桃などが咲き、芍薬の莟も膨らんでいる。それらは信子が丹精した花々である。
丈太郎はいつも彼の定席にしている縁側の籐椅子に腰をかけ、その子供っぽい色彩の氾濫を少しうるさく感じていた。しかしこれは信子の唯一の趣味、娯しみというべきものだから批評はいわない。どの角度からこの酣の春の庭をカンバスに納めるかを考えていた。
その時、縁側の外れの、茶の間との境の板戸が開く音がして、信子の声が背後からいった。
「わたし、出かけてきますから」
信子は背後から廻ってきて、彼の前に立った。

「夕飯に間に合わないかもしれませんから、美保さんに頼んでおきましたよ」
それを聞いてはじめて丈太郎は目を妻に向けた。そして思わずいった。
「どうしたんだ、それは……」
「それ」というのは信子の顔、「厚化粧した六十四歳の女の顔」を指している。妻の顔はかつて見たこともなかったくらい白く塗られている。唇にはオレンジ色の口紅。その上に垂れた瞼の下、いつも眠そうな細い目の上に青い色がついている。
丈太郎は呆気にとられてしげしげと妻を眺めた。
「どうかしら」
妻はいった。
「なにがだね」
「この服よ、どう?」
妻の厚化粧に気を取られていたが、服装もいつもと違っている。白地に紫色の蝶々が飛んでいて、胸もとに妙なヒラヒラのついたブラウスを着ている。その下のスカートは裾の広がった薄紫だ。胸のヒラヒラの上に何の材質か、白い玉を連ねたネックレスを垂らし、耳にも同じ白い玉をつけている。
「なんだ、それは……」
彼はいった。ほかにいうべき言葉が見つからなかったのである。
「クラス会なの、女学校の」
信子はいった。
「いつも欠席してきたから今回は行こうと思って」
信子がにっと笑うのを丈太郎は呆然と眺めた。こんな笑い方を見るのははじめてだった。いった

い、この女は……と思った時、
「わたくしね」
信子はいった。
「生活の意識改革をすることにしたの。ずーっと考えてたんだけど、今日から始めることにしたんです……」
それはまったく、「青天の霹靂（へきれき）」という格好でやってきた。予兆というものはまったくなかったから（いや、あったのだが、ただ丈太郎が気がつかなかっただけなのかもしれない）何の心の準備も出来ていなかった。
「意識改革？　何の意識改革だ……」
信子の靴音が玄関の敷石の上を踏んで行った後、丈太郎は漸（よろや）く気をとり直して考えた。意識改革とはどういうことかと訊（たず）ねた丈太郎に対して信子が残した言葉は、
「意識改革は意識の改革ですわ」
といっただけだった。
「じゃあ、行ってきますから……」
「何時頃帰る？」
「さあ？……多分遅くなると思います」
「すみません」と今まではいったものだった。
「なるべく早く帰るようにします」と申しわけなさそうにいったものだ。
丈太郎はポカーンとして坐っていた。何が何だかさっぱりわけがわからない。信子の上に何か新しい事態が起きたらしいことはぼんやりわかるが、それがいったいなぜ起きたのかがわからない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com